

「つながり」を作り、「つながり」で作る読書感想交流

広島県三原市立第一中学校教諭

小迫 洋子

1 「読書 からカギカッコを取り払う

教育現場での読書には、「〇〇の力がつく」「豊かな心を育てる」など、「本、このよきもの」という価値観がついて回りがちである。そしてその結果、かえって子どもたちを本から遠ざけている場合も多いのではないだろうか。「ありがたい」「ためになる」「感性を培う」「集中力が付く」……etc. たくさんの「カギカッコ」に縛られ、読書は今、とても窮屈なものになってしまっているように思う。

子どもたちは、ためになるから本を読んでいるわけでも、力をつけようとして読んでいるわけでもない。おもしろいから読み、使えるから利用するのだ。そしてもう一つ、「誰か（多くは友達）とつながりたいから読む」。

さんの、『そばにいてあげる』（原生林・一九九七）の中から、『ジョーカー』と『ささくれハートの女王様』の連作を用いた。

授業の流れは、

◎ 作品を読み、感想を書く。

◎ 感想を無記名でプリントし、全体で読み合う。

を三回繰り返し、いたってシンプルなものだが、生徒が自らの感想を深めていくために、

一回目…思ったことを自由に書く。（箇条書きも可）

二回目…自分がなぜそう思ったのかという根拠を明確に示す。

三回目…作品の枠組みを通して自分を見つめて書く。

（一年生は作者への手紙という条件をつけて書かせている。

今はまだクラス単位の交流だが、これから全クラスの感想をファイルして学校図書館に置き、クラス・学年を越えた感想交流もしていきたいと考えている。

また、作家との交流も進行中である。作者の小森さんは私の友人なので、子どもたちの感想はすべてメールで小森さんに送っているのだ。今後、子どもたちの感想や手紙に対して、小森さんからの返事が来るようになっており、子どもたちも大変楽しみにしているようである。

これは本当に大きな理由である。本を「媒介」にしてつながる：「本で友達」というわけだ。そしてこの「つながり感」は、子どもたちを読書へと向かわせる大きな力だと思ふ。つまり、本は子どもたちにとっては「このよきもの」ではなく、「媒介」なのである。

子どもが本と結び付いていく過程では、本そのものが目的であることはほとんどない。それならば、私たちが「読書はツール」であると割り切って考えたほうが、アプローチもしやすいのではないか。そして、こう考えることこそが、たくさんのカギカッコを読書から取り払って、読書を本来の自由な存在に戻し、さらには子どもたちと本を結び付けるために必要なことではないのか。

このような思いから、本を「媒介」とし、たくさん「つながり」を作る読書指導を日々模索している。

2 読書感想交流の概要

現在私が取り組んでいるのは、「読書感想交流」である。この実践の目標は、大きくいうと、

- ① 読書を通じてさまざまな「つながり」を作る
- ② 感想交流を通して自分の読書感想を育てる
- ③ 作品の枠組みを通して自分を見つめる

の三点で、テキストには橋本香折（現在は小森香折

3 本を「媒介」とすることの可能性

学校生活の中で、子どもたちが自分の思いを語ることはいまより思うように思う。しかし、「本当は自分の思いを語りたい、聞いてほしい」という気持ちをもっている子は少なからずいるのだ。それなのに子どもたちが語り得ないのは、彼らが「語りたい」という気持ちと同時に「素の自分を語るのには難しい（恥ずかしい）」という思いも抱いているからであろう。

これらのことを考え合わせると、本を「媒介」にするということとは、子どもたちにとっては「二重の意味をもつ。」「語るための手段」と「逃げ道」である。本を媒介にしたとき、子どもたちは自分を語るための手段を得ると同時に、「今言っていることは本を通して感じたことなのだ。」「素の自分を語っているのではない」という逃げ道も得るのだ。そして、逃げ道が保障されることで、子どもたちの語りは可能になるのである。何かと評判の悪い読書感想文だが、「本を媒介として自分の思いを語るための手段」としてとらえ直せば、さまざまな可能性が拓けてくるのではないだろうか（本来読書感想文とはそういうものなのだろうか）。今回の読書感想交流でも、本が「媒介」として存在したからこそ、自分を語り得た子どもたちがたくさんいたように思う。

『ジョーカー』のカンノ・ミサキは、自分がジョーカーだと思い、「ジョーカーは悪い子」と思い、それを演じてそれだけを表に出して、本当の感情・気持ちを、心の奥底に封印しているように思える。決して本当の感情を表に出さない。出しても無駄と知っているようだ。まわりの先生や同級生、そして母親は、ミサキが「ジョーカー」という仮面を作り上げ、その仮面を決して外してはならないようにしているようだった。そしてミサキは、ハートの女王様の本当の一面を目にしても、何も言わなかった。それはたぶん、自分、ジョーカーが、何を言っても無意味、ましてやハートの女王様のマサエがやったと言っても、無駄に決まっていると思っただろう。相手は女王様。自分はジョーカー。ジョーカーが「女王様は万引きした」と言っても、だれも信じないと思う。まわりはミサキがうそを言っているのしか思わないと思う。だから、ジョーカーの仮面をかぶっているミサキが発言してもいいことは限られている。または、自分で決めてしまっていると思う。(後略)

ある二年生女子の一回目の感想文である。彼女はこ

まり変わっていないような気がするけど、自分のどこかで、なんとなく変わっているような気がする。それを言葉にするのはまだ無理だけど、いつかは言葉にしたい。

友達と気軽に話すというのは、彼女の日常生活の中では、現在のところほぼあり得ないことである。本という媒介がなかったら、そして「匿名性の保障」がなかったら、彼女は自分の気持ちを吐露することなどなかったのではないだろうか。

今回の実践を通して、私は「匿名性の保障」というのは、感想を育てる指導過程では、こちらが考えていた以上に大切なことなのではないかと思うようになった。

4 感想の変容

子どもたちの中には、読むことや書くことに抵抗を感じる子が少なからずいる。また、すぐに「めんどい」「うざい」と、考えることそのものをやめてしまう子もいる。そんな子は、疑問に思ったことについて、理由を考へることなく疑問のまま書いてしまうか、取りあえず「いい子」の立場で正論を書いておこうとしがちである。

四月から本校に転校してきた子で、今ひとつクラスにも学年にもなじみずにいる。授業中の発言には非常に積極的なのだが、友達と関係を作るといふ段になると及び腰になっているように思う。前の学校ではいじめに遭っていたらしいので、それが関係しているのかもしれない。

彼女は、物語の主人公について語ることで、自分の状況(情況)についてをも語っていたようだ。「作文、上手だね」と声をかけると、「うちもそんなこと思ってたけえ、ミサキもそうだと思った」と話してくれた。

彼女の意見には、数人の子が感想を寄せた。そのことが彼女にとっては嬉しかったようで、二回目の感想交流では、次のような感想を書いてきた。

感想の中には、自分が考えてなかったことや疑問に思っていないものとかいろいろ出てきて、感想を読むのもおもしろいなあと思った。感想を読んでいると、みんなと討論しているような気持ちになりました。本文だけでなく、人の感想にもいろいろなおもしろみがあることがわかりました。「みんなはこう思ってるけれど、うちはこう思う。」といろいろな感情がすれ違うところに、とてもひかれました。みんなの感想を読んでも、自分の考え方はあ

『ジョーカー』を聞いて、暗い話だと思った。もし自分がミサキのような立場だったら、マサエのことをちくって、自分は花をつんでないと言っといたと思う。なのに、ミサキはなんで万引きのことをちくらなかったのかと思った。

ある二年生男子の一回目の感想文である(前述の女子とは別のクラス)。この生徒は二回目の感想も、なぜそう思ったのかという根拠を書かないまま、ほぼ同じ内容を書いてきたので、「もしミサキがマサエの万引きのことを言っていたらどうなった?」という質問を試みた。いくつかのやりとりをして考えさせることで、感想が深まっていく子は結構多いのだが、彼は、考えてはいるようなのだが、何も思いつかず(あるいは言葉にならず)黙り込んでしまった。その時、私の傍らで二人のやりとりを聞いていた他の男子生徒が、「だれも相手にしてくれんのんじゃない?」と話に加わってきた。その言葉がきっかけで、黙り込んでいた生徒も自分の考えを言い始め、語り合いの中で、少しずつ感想を育てていった。三回目の感想を書いている時も、同じ三人による語り合いがあり、彼は最終的には次のような感想を書いてきた。

もし自分がミサキだったら、みんなから悪者扱いされて、だんだん腹が立って八つ当たりすると思います。でも、八つ当たりばかりでも、状況は悪くなるばかりなので、ほくだったら、黙って何もしないとと思います。でも、ミサキは遠くの方で筆箱が落ちて「ごめんなさい、私が悪いんです。」と言っている。ミサキはたぶん、黙っていて自分を閉じこめてるけど、何か言って、まわりの人にかまってもらいたかったんじゃないかと思いました。(後略)

他者との「つながり」によって、彼の感想は言語化され、変容していったのである。

この読書感想交流の授業は、全て学校図書館で実施した。感想を提出した子は、自由に本を読んだり、話をしたりしていたのだが、作品を媒介とした語り合いもいくらか見られた。私の周りにも数人の生徒が来て、執筆中の生徒と私のやりとりに参加してくれた。

「書くこと」における語り合いの力には、以前から気がついていたのだが、教室空間では生徒同士の語り合いがなかなか成立せず悩んでいた。今回、場所を図書館に移しただけで語り合いが成立したのには、拍子抜けした思いだったが、「日ごろから学校図書館を語り合いの場

にしようとしてきたこと」「本を媒介として日々生徒とつながりを作ろうとしていること」が、少しは実を結んだかなと、嬉しい気分浸っているところである。

5 「つながり」から、また新たに始める

私の中にはどのくらいたくさんの”自分”がいるかわからないけど、この本で何人もの”自分”が仲間入りしたと思います。さらに、いろんな人と感想を交流して、もっともっと自分が増え(?)ました。でも、私にとってここからが問題かもしれません。「どんなときにどの自分を出してどう動くか」です。(中略)一冊の本でこんなに考えさせられました。

ある一年生が小森さんに宛てて書いた手紙の一部だ。彼女は私にも「(交流が)楽しかった」と言ってくれた。

結局、読書指導の際求められるべき姿勢は、子どもたちに本を「与える」ことではなく、読書からさまざまなカギカッコを取り払い、「本を媒介にして、自分は子どもたちとどういう関係性を築くのか」ではないだろうか。「つながり」から始める読書指導の可能性を、これからも探っていきたいと思う。